

I 聖性と油彩

これまで見て来たような、19世紀のフランスに於ける聖性表現を巡るモードの問題は、キリスト教絵画ではないジャンルに於いて如何なる射程を持ちうるか。本章ではこの問題を、明治期の洋画を例に考えてみたい。

1890（明治23）年に第三回内国勸業博覧会に出品され、のち護国寺に奉納された原田直次郎の《騎龍観音》（図1、護国寺蔵・国立近代美術館寄託）を目にする時、今日少なからぬ人々が何か奇妙な違和感を覚えることは、例えば近年刊行された日本美術全集のこの作品に関する記述の中に「その不思議な絵画的魅力」といった一節があることから伺われる*1。尤もこれは何も原田の作品に限ったことではない。原田と同じ1887（明治20）年にフランスから帰国した山本芳翠が、1893（明治26）年に第七回明治



図1 原田直次郎《騎龍観音》1890（明治23）年、護国寺、東京国立近代美術館寄託

美術会に出品した《浦島図》（図2、岐阜県美術館）を始めとする明治中期の歴史画は、「ひとむかしまえなら、とても人寄せの看板にはなりがた」い「美術愛好家の感性をさかなでしそうな作品」であった*2。

これらの作品が持つグロテスクまでのなまなましい印象は、それらが日本的な主題を、西欧油彩画の迫真的な技法を用いて描いた点にあるだろうことは、例えばこの作品をほ

*1 《騎龍観音》の図版解説（三輪英夫）、高階秀爾、小林忠、三輪英夫他編『日本美術全集 第21巻 江戸から明治へ 近代の美術Ⅱ』講談社、1991年、198頁。

*2 丹尾安典「"異端図"たちの逆襲」『芸術新潮』1994年3月、12頁。